



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報(101)
Issue Date	1938-05-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78100
Type	column
Note	各務時報 100号と同時に撮影
File Information	A010_13929597102104110_Part4.pdf



[Instructions for use](#)

各務時報

芒亭書屋談叢

犬山で花火の大会でもあつたのであらう。それを養老あたりからワザ／＼見物に出掛けて行く人が電車の中で色々話して居るのを聞いた事がある。その老人の云はば花火の美學の講演を聞いて私は始めて花火にも味はへば深い味はひのあるものらしいと云ふ事を知つて寧ろ驚いたのである。

だが私が其の時最も驚いた事は、私等が平素餘り振り向きもしないこんなものでも私等が鑑賞の眼をそこに向ければ、全く夢想もしない世界がそこに展開するものではないのか。そしてそんな世界は私等の身邊に到るところにころがって居るのではないのかと云ふ事であつた。

飛騨の山村で村の若者達が演じた獅子舞を見た時も私は同じ様な感慨にひたつた事がある。獅子舞も私は平素低級野卑なものとはばかり思ひ込んで居たのであるが、其時見た獅子舞は此私の従來の考へを一新するに充分なものであつた。

生き續けて行く限り新しい世界は次ぎ／＼に現はれて来る。然し新しい世界と云つてもどれもこれも前から知り切つて居るものばかりで、只心を据へて見向はして見たと云ふ丈である。客觀の世界が變つたのではない、それを寫し現はす心の鏡が一枚づつ加はつて行く丈である。鏡がなければ見れども見えぬ、開けども聞えないのである。それは知識ではなく、謙虚な氣持が無いからである。新しい鏡が一枚加はつた時には天涯に今生れて来た様な謙虚にして而かも潑瀾たる感じがする。

私は玄海灘の一孤島に育つたのであるが、私が中學の上級に居た頃、よく山に登つて感傷的な氣持になつた時の事を今もあつ／＼と記憶して居る。

あの島の近海には歐洲航路や支那航路の優秀な汽船が相當頻繁に通るのであるが、夕方近くになると悉くの船室から明か／＼と電燈の光りもれ文明の力が船の中に充溢して居るかに見えた。その頃私の島には電燈もなく沖を通る船の中の文化と比すれば何十年も遅れた生活様式を持つて居た。

私が山の上で感傷にひたつたのは、あの船には最新の文化が運ばれて居る様に思はれ、そして此島のすぐの近くを通りぬけながら通る度に島はおいとけぼりにして居ると云ふ取り残される者の哀愁である。そして自分達の生活から斷分距離のある様に思はれるあの船の中の文明の精粹を色々に想像したのであつた。此哀しみ驚きの中に私の心の中には、現代文化の精粹を寫し現はしたい鏡が一枚何としても準備された事と思ふのである。

然し其鏡は無限の興趣を含む人生を寫し現はす無数の鏡の中のほんの一枚に過ぎなかつたのである。生きて行く楽しみはそんな鏡が一枚づつ加はつて行く事である。(芒亭)

昭和三十三年三月十五日
發行日五十月三年三十和昭
部刊校學科國等高級
明川吉

各務時報

芒亭書屋談叢

促成栽培禁止の御觸書の事

「徳川禁令考」卷四十四及び卷四十九に促成栽培禁止に關する御觸書が數種ある。促成栽培の技術は明治以後のものであり、少くとも舶來のものだらう位に思つて居た私は、此等の御觸書によつて其が江戸時代に既にあつたばかりでなく禁令を要する位に進んで居た事を知つて非常に興味深く感じた。御觸書の一つには次の様に書いてある。

『天保十三寅年四月十一日
野菜もの之儀に付御觸書』

野菜もの等季節いたらざる内賣買いたす間敷旨前々相觸候趣も有之處近來初物を好み候儀増長いたし殊更料理茶屋等に而は競合買求高直之品調理いたし候段不埒之事に候譬はきり茄子あんげんさ上げ之類其外もやしものと唱雨障子を懸芥に而仕立或は室之内江炭團火を用養ひ立年中時候外れに賣出候段修を導く基に而賣出し候もの共も不埒之至に候間以來もやし初ものと唱候野菜類決而作出し申間敷旨在々江も相觸候儀其旨を存し堅賣買いたす間敷候尤魚鳥之儀は自然之漁獲に而賣出し候は格別人力を費し多分之失脚を懸伺込仕立置世上江高價に賣出候儀は是亦堅不相成候若相背候もの有之におゐては吟味之上急度可申付候

右之通町觸中候御料は御代官私領は領主地頭より可相觸候

但在所之品前々より献上之類は只今迄之通可被心得候
右の文面によれば當時の促成栽培も相當に進んだものであつた事が分る。暖房装置によつて年中時候外れのものを出すと云ふのであるから誠に相當のものである。そして禁止した理由はそれが奢侈を導く基であると見たからである。野菜でも魚鳥でも自然の供給の季節に従つて賣る可きであつて、所謂タイム、パリュニを高める爲に特別に人力を費す事は、一國の生産力を有効に用ひる以所でないかと考へられたからであらう。特に今日國民の生産力の統制が叫ばれて居る時、思ひ合せて考へさせられる話である。

然し若し此天保年間之禁制と同じ様な促成栽培禁止の法令が今日出たとしたらどうであらう。而して其は必ずしも考へ難い事ではない。温室栽培や其他色々之の促成栽培は贅澤と云へば明らかに贅澤な事であり、國民の生活に無くてならぬものではあるまい。國民としてもつと肝要なものゝ生産に其勢力が向けられるなら、國家の爲にはもつと望ましい事かも知れぬ。幸にして今日國民の餘力は尙ほ充分に存して居るから、今其必要はないであらうが、國民として其覺悟はなくてはならぬ。

今は丁度メロンや苺の季節である。何百年も何千年もの間私等の先輩が次ぎ／＼に自然に加へた少しづつゝの修正。その修正の總掛りが一粒の苺にも宿つて居る譯である。私等はかくの如き先輩の勞を感謝しなければならぬと共に、メロンや苺を食べ得る餘裕を持つ國家に生れて居る事を有り難く思ふのである。(芒亭)

昭和三十三年五月二十八日
發行日一十三月五年三十和昭
部發交校學科國等高級
明川吉
地番二十町新七市京
郎次貞田河者刷印
地番一十町新七市京
社會式株印西所國印
店支京